

【本文】

末法に入つて法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり。若し然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經となふるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり。妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり。今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり。然れば阿仏房ながら宝塔、宝塔さながら阿仏房、此より外の才覚無益なり。聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり。

【通釈】

末法に入つて法華經を持つ男女の姿よりほかには宝塔はないのである。もしそうであるならば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經と唱える者は、我が身がそのまま宝塔であり、また多宝如来である。妙法蓮華經よりほかには宝塔はないのである。法華經の題目は宝塔であり、宝塔はまた南無妙法蓮華經である。今阿仏上人の一身は地水火風空の五大であり、この五大は題目の五字である。それゆえ阿仏房はそのまま宝塔であり、宝塔はそのまま阿仏房である。この信解以外の才覚は無益である。聞・信・戒・定・進・捨・慚という七宝をもって飾つた宝塔である。

【主な語句の解説】

宝塔：經文に説かれる莊嚴された塔。特に、法華經見宝塔品第十一で大地から出現した七宝莊嚴の塔（多宝塔）のこと。
多宝如来：宝塔の涌現と共にその中に坐して出現し、釈尊の説いた法華經が真実であることを証明した仏。過去世において、法華經説法の座に必ず出現し、法華經が真実であると証明することを誓つた。
五大：一切万物の構成要素である地・水・火・風・空のこと。大聖人は、この五大を妙法蓮華經の五字に配された。
七宝：法華經では、金・銀・瑠璃・砗磲（しゃこ）・碼瑙（めのう）・真珠・玫瑰（まい）の七種の宝玉を七宝と説かれる。大聖人は本抄で、聞・信・戒・定・進・捨・慚を七宝とされている。

【背景と大意】

本抄は、文永十二（一二七五）年三月十三日、日蓮大聖人御年五十四歳の時に、身延の地から佐渡在住の阿仏房へ与えられたお手紙です。阿仏房は熱心に念仏を信仰していましたが、大聖人の教化により正法に帰依し、妻の千日尼と共に身命を賭して大聖人の外護に努められました。阿仏房は高齢にもかかわらず、身延の大聖人の元へ三度も参詣しています。

内容は、阿仏房からの法華経の宝塔涌現についての質問に対し、宝塔とは法華経の題目であり、さらには法華経の行者の当体であることを示され、それはまた、妙法の漫荼羅御本尊であるとの深義を明かされています。また後段において、信心強盛な阿仏房を「北国の導師」と讃え、夫婦で御本尊を固く受持していくよう奨励されて本抄を結ばれています。

○宝塔涌現の意義

法華経見宝塔品第十一には、金銀等の七宝で飾られた宝塔が大地から涌現し、宝塔の中から多宝如来が大音声をもって「法華経は真実なり」と証明されたことが説かれています。阿仏房は、この宝塔涌現の意義について「多宝如来涌現の宝塔何事を表はし給ふや」（御書七九二）と質問されました。この問いに対して大聖人は、「此の法門ゆゑしき大事なり」（同右）と仰せられた上で、宝塔とは寿量文底の南無妙法蓮華経の題目であり、大聖人御図頭の漫荼羅御本尊であると教示されています。

拝読の御文には、「末法に入つて法華経を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり」と、御本尊に向かつて題目を唱えていく姿がそのまま宝塔と顕れると示されています。総本山第六十六世日達上人は、本抄の御説法において「お題目を唱える我々は即ち宝塔、我々即ち南無妙法蓮華経である。妙法蓮華経即ち宝塔、宝塔即ち妙法蓮華経を唱えるところの我々であるということを、はつきりお考えになればいいと思うのであります」（達全一一二—一二—三二〇）と御指南です。

いよいよ自行化他の仏道修行に邁進しようではありませんか。

○粘り強い折伏の実践を

大聖人は拝読の御文に「聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔なり」と仰せられ、信心の要諦を教示されています。「聞」とは正法を聞くこと、「信」とはその正法を信受すること、「戒」とは非法を防ぎ悪法をとどめること、「定」とは散乱の心を破して安定した信心に住すること、「進」とは唱題・折伏に精進すること、「捨」とは謗法への執着心を捨てること、「慚（慙）」とは自らの慢心や懈怠を恥じて反省することです。

私達は、本門戒壇の大御本尊・大聖人様の御心を絶対と信じ、御法主上人猊下の御指南のまま自行化他の実践・折伏に励むことによつて我が身が七宝で飾られ、真の幸せ、すなわち成仏の境界を築くことができます。

唱題・祈念を真剣に重ねていけば、必ず折伏の機会が訪れます。要は諦めないこと、粘り強い折伏こそが広布への道を開く鍵となります。大いに活動の範囲を広げ、精進いたしましょう。

○謗法・斫伏について

日如上人御指南

今も多くの人が間違つた信仰や思想、誤つた考え方に執われて、不幸に喘いでいます。その姿を見た時に、私達は、その人達を救うために、その人の持つてゐる考え方を、間違つた信仰を破折してあげなければなりません。これが折伏なのであります。

愚人云く、聖人の言の如くば、実に首題の功莫大なり。但知ると知らざるとの不同あり。我は弓箭に携はり、兵杖をむねとして、未だ仏法の真味を知らず。若し然れば得る所の功德、何ぞ其れ深からんや。

聖人云く、円頓の教理は、初後全く不二にして、初位に後位の徳あり。一行一切行にして、功德備はらざるは之れ無し。若し汝が言の如くば、功德を知りて植ゑずんば、上は等覺より下は名字に至るまで、得益更にあるべからず。今の経は唯仏与仏と談ずるが故なり。譬喩品に云く「汝舍利弗、尚此の経に於ては、信を以て入ることを得たり。況や余の声聞をや」。文の心は、大智舍利弗も法華経には信を以て入る、其の智分の力にはあらず。況や自余の声聞をやとなり。されば法華経に來たりて信ぜしかば、永不成仏の名を削りて華光如来となり。嬰兒に乳をふくむるに、其の味をしらずといへども自然に其の身を生長す。醫師(くすし)が病者に薬を与ふるに、病者薬の根源をしらずといへども、服すれば任運と病愈ゆ。若し薬の源をしらずと云ひて、医師の与ふる薬を服せずば、其の病愈ゆべしや。薬を知るも知らざるも、服すれば病の愈ゆる事以て是れ同じ。既に仏を良医と号し、法を良薬に譬へ、衆生を病人に譬ふ。されば如来一代の教法を擣篔和合して、妙法一粒の良薬に丸せり。豈に知るも知らざるも服せん者、煩惱の病愈えざるべしや。病者は薬をもしらず病をも弁へずといへども、服すれば必ず愈ゆ。行者も亦然なり。法理をもしらず煩惱をもしらずといへども、只信すれば見思・塵沙・無明の三惑の病を同時に断じて、実報寂光の台(うて)な(に)のぼり、本有三身の膚を磨かん事疑ひあるべからず。されば伝教大師云く「能化所化俱に歴劫無く、妙法経力即身成仏す」。法華経の法理を教へん師匠も、又習はん弟子も、久しからずして法華経の力をもて俱に仏になるべしと云ふ文なり。

「もし、人がよく汝が説く所を信ずることあらば、すなわち為(これわれを見、また汝とおよび比丘僧と、並びに諸の菩薩を見るなり。

この法華経は、深智のために説く。浅識はこれを聞いて、迷惑して解せず。一切の声聞、および辟支仏は、この経の中に於いて、力及ばざる所なり。汝、舍利弗すら、尚この経においては、信をもって入ることを得たり。いわんや余の声聞をや。その余の声聞も、仏語を信ずるが故に、この経に随順す。己が智分に非ず。また舍利弗。憍慢・懈怠にして、我見を計する者には、この経を説くことなけれ凡夫の浅識は、深く五欲に著し、聞くとも解することあたわず。また為に説くことなけれ。

成仏は智慧に依るものでない

智慧というものは、一定のものではありません。子供から大人になる間、智慧というものは変化するものであります。大人になってから智慧がどんどん増えてくるか、そうではありません

五十〜六十になると耄陸もろくしてきます。耄もろくという字は六十と言うことで、陸とは、その資格(正常なこと。まともなこと。満足できる状態)があると言うことで良い言葉であります。大人になると智慧も変化がある。六十〜七十になって若い者と智慧比べをしてもかきません。たしかに経験上からすぐれているでしょうが、智慧と言うことに、おいては劣ってくる。智慧は活動・行動が無ければ用を足しません。また、智慧というものは年齢に拘わらず、ある人もない人もいます。

信心とは

大聖人様の御本尊様が有難いから、ありがたいから信ずる事は間違いないである。自分の心に従わず、大聖人様・末法の仏様の、御心を信じるのが信心である。

大聖人様の仏法とは

以心代慧(信心をもって仏道の本因とする) 信をもって慧に変わると言う教えであります